

「ままごと」の新聞

newspaper of
mamagoto

第4号

「ままごと」の新聞は、柴幸男の作品を上演する団体「ままごと」が不定期に発行する活動報告紙です。
発行日：2013年1月16日
発行元：「ままごと」

「街と演劇」

そして船は行く

柴 幸男
Yukio Shiba

2012年は、3本の新作公演を行った。それぞれが実験で、うまくいったことも、うまくいかなかったこともある。そのことばかりを考えているし、考えてしまう。とりとめもないと思う。せめて未来に生かさればと願うだけだ。すぐに考える時間もなくなる。新しい年がはじまったのだ。

あいまがわらず日本中を飛び回っている。這いずりまわっていると言ったほうがいいのかも。れない。この数年、すこしでも道のある方へ行ったことのない場所へ、会ったことない人々へと向かって活動した。どうしてだろう。人がそんなに好きなのじゃないのに。誰かと話すのが得意な性格でもない。でも、知らない町で知らない誰かとすれちがうのが好きだ。声が聞こえた瞬間、その人の生活を、人生を想像する。そして、少しだけ分けてもらったような気がする。きつと僕はわがままだ。自分の人生だけでは足りないと思う。だから僕は人と会う。その人の向こうに、自分が生きなかつた時間を眺めている。僕が芝居をつくる理由も、それと同じだと思う。

今年、僕たちは小豆島に行く。春から秋にかけて、島に滞在し作品をつくり発表する。僕自身はもう何度も島に渡っているし、昨年末には劇団員全員で小豆島を訪れた。僕らが滞在する予定の港は、神戸から3時間、船に乗って行く。



今年、滞在予定の小豆島 坂手港



この旧坂手幼稚園を「港の劇場」にする



幼稚園の舞台に座るままごとメンバー



フェリーのデッキから

大きなフェリーに乗って空と水平線を眺めることが、僕のお気に入りになった。小豆島の夏はまだ体験していない。とても楽しみにしている。小豆島は想像してたよりも大きく、3万人も

の人が住んでいる。これは僕が生まれた町と同じ人口。それほど違いがあるわけじゃない。でも、島の景色は僕に考えさせる。誤解を恐れず言えば、小豆島は、死にゆく場所だと思ふ。別に小豆島だけじゃない、僕も死に向かつて進む存在だし、日本も、地球も、誰だつてそうだ。だから、僕たちは錯覚しながら生きている。死は存在しないかもしれない、自分

分は死なないかもしれないと錯覚しながら、さながら生きている。でも、島ではそうはいかない。ここには人生の先輩ばかりがいる。だから、僕らの未来も想像できる。人の作ったモノの、人間の、先が見えてくる。子どもたちは、それでも笑っている。この港で最も眺めのいい場所は、墓地になっている。僕はそれを美しいと思う。この島で僕たちは何ができるだろうか。僕らにできるのは祭ではないだろう。過去への逆行でもない。たぶん未来を真摯に、彩ること。小豆島のプロジェクトは、今年の僕たちの大きな仕事になるだろう。

船の甲板で、波のしぶきを見ながら考える。ずっと場所を求めて動いていた。今年も場所を求めながら動く。だけど、いよいよ場所を作らなくちゃいけない。そうでなくては、僕たち自身もたなくなつてきている。飽きっぽい性格だからどうしようもない。これは冒険であり、船出になるだろう。着いた場所には何もなかったかもしれないし、途中で難破する可能性もある。だけど、この先に理想の場所があるのだと舵をとる。確信はない。潮の流れはそらだと言っている。気がする。自信を持って嘘をつく。この方向で間違いない、帆を張れ。それがきつと船長のつとめ。

かつて、僕は、演出家と制作がいれば、演劇はつくれるんじゃないかと考えていた。でもそれは間違っていた。いま、僕が目指す方向には仲間が必要だと思ふ。僕は、それを求めようと思ふ。人に頼るのが苦手な僕が仲間と手をとることは難しいとは思つけど。別れの寂しさは覚悟しても良い年にやつとふたつたんだと思ふ。

Yukio Shiba
82年愛知県出身。青年団演出部所属。日本大学芸術学部在学中に「ドミニ」で第2回仙台劇のまち戯曲賞を受賞。2010年「わが星」にて第54回岸田國士戯曲賞を受賞。同年に劇団「ままごと」を旗揚げ。

ままごとへの挑戦状

多田智美

from 大阪

「ままごと」の「わが星」公演を観てきました。映像で何回も見たいけど、目の前で繰り広げられる世界は本当に素晴らしい。時間、空間、音、言葉、光、身体、すべてがびびりたりで、感涙やつぱり、コンテンツに最適なメディアであるアウトプットだから表現の強度が半端ない。

これは、2011年5月7日の夜に書いた私のツイートである。2010年3月、大阪にある演劇BARにて「わが星」映像を見て以来、映像を見るために通い詰めた後の三重公演（5月7日）。自らメディアの内側に入り込むような体験に、なぜか涙が止まらず、演劇とメディアに対する考え方が一変した。「わが星」との出会い、私の編集人生においても事件だった。その少し後の5月11日。柴幸男さんに初めてのメールを送っていた。大阪・北加賀屋にある千島土地株式会社の100周年記念誌での相談だった。「ワクワクするような、読みたくなる100年史をつくりたい」という少し変わった社史の依頼で、私は編集を担当。会社の歴史を伝えるとともに、100年という時間を感じ取ることができ、これからの100年に想いを馳せることができるような本にしたいと思えた。そこで、「わが星」を通して、時間と空間をひいて飛越える体験を与えてくれた柴さんに、100年を組む物語をつくってもらいたいとお願ひしたのだ。彼は、大阪・北加賀屋のまちを歩いてみた、時間について深く考えたり、1年もの時間をかけて物語を紡いでくれた。そこに、大阪在住のイラストレーター・dannyによる絵が寄り添い、2012年夏、世界中どこにも無い100年史が完成。舞台と誌面、表現の場は異なっても、何度読んでもグッとくる素晴らしい物語が誕生した。

2012年7月1日、三鷹市芸術文化センター1での公演「朝がある」では、その物語の根底にある思考がそのまま舞台に立ち現れてきた。また改めて、メディアに合わせて、最適な解を導きたす劇作家・演出家として彼の力量に唸った。と同時に、もっともっと今までに無い挑戦ができるプロジェクトを一緒にしたいという気持ちがかくかく湧いてきた。

2013年、柴さんに、さらに新たな挑戦状を投げかけている。それは、瀬戸内国際芸術祭での16年ぶりに開港した小豆島・坂手でのプロジェクト。半年間かけて、どんな物語が生み出されるのかから楽しみたい。

Tomomi Tada
編集者 editorial studio MUSEUM 代表。出来事が生まれる現場から、ドキュメンテーションまで、をテーマに書籍やWEB、展覧会およびイベントの企画・編集を手掛ける。